

主の降誕ミサ説教

2021年 12月24日19時 鹿児島カテドラル・ザビエル教会

皆さま、私たちは、今、主イエスの誕生を祝うミサを捧げています。まさにキリストのミサ、Christmasつまり、クリスマスをお祝っています。

全世界の教会は、今年の12月8日に教皇様提唱の「聖ヨゼフ年」を閉幕しました。鹿児島教区では、あまり強調されなかったため、ご存じでない方も多数おられると思います。

そこで、今日は、聖ヨゼフ様を手掛かりに、主のご誕生の意味を深めてまいりたいと思います。

先ほど読まれた福音の冒頭をもう一度、確認します。

「そのころ、皇帝アウグストゥスから全領土の住民に、登録せよとの勅令が出た。これはキリニウスがシリア州の総督であった時に行われた最初の住民登録である。人々は皆、登録するために各々自分の町へ旅立った。ヨセフもダビデの家に属し、その血筋であったので、ガリラヤの町ナザレから、ユダヤのベトレヘムというダビデの町へ上って行った。身ごもっていた許嫁のマリアと一緒に登録するためであった。」

時代的背景を説明いたします。当時のイスラエルは、ローマ帝国の属国でした。つまり、ローマが直接統治するのではなく、ローマ皇帝が任命した、ヘロデ大王が統治していました。従って、人民はヘロデ大王へ税金を納めていたのですが、皇帝アウグストゥスもイスラエル人民から税金を取り立てる意向を示し始めました。つまり、住民に出生地での住民登録を命じたのは、将来住民から人頭税を徴収するためでした。実際、イエス様が、30歳になって宣教活動を始めたころ人々は、ヘロデ王とローマ皇帝へ納める2重税で苦しめられていました。

ところで、ヨセフ様の出生地はベトレヘムであることが分かります。しかも、ダビデ王の血筋であったとも明記されています。これはとても高貴な血筋です。ご存じのようにダビデ王はイスラエル建国の父であります。今日のイスラエル国の国旗はダビデの星であるし、エルサレムにあるダビデ王のお墓にはユダヤ人の巡礼者が絶えません。

ダビデは王となって、ベトレヘムから9キロぐらいいさかのぼったシオンの丘に首都のエルサレムを建立しました。紀元前1000年のことです。イスラエルの国土面積は、四国のそれより少し小さいくらいですが他民族を制圧して、イスラエルの部族から国家へと変貌を遂げたのでした。この由緒あるダビデ王の血筋を引くヨセフ様ですので、今のイスラエルの人たちはもう少し注目してもいいのではないかと思います。

さて、話は進み、

「マリアは月が満ちて、初めての子を産み、布にくるんで飼い葉桶に寝かせた。宿屋には彼らの泊まる場所がなかったからである」と福音書は語ります。

ベトレヘムはその日、住民登録のために全国から帰省した人々でにぎわっていたに違いありません。久しぶりに再会した、同郷人たちは祝いの盃を交わしていたかもしれません。故郷に帰省した人々のお正月の風景に近いものがあつたのではないのでしょうか。

貧しかったマリア様とヨセフ様は、家畜と同居している最下層の人々の中にいました。この風景は都会の繁栄と、田舎の貧しさの際を明確にしています。これは栄華と質素という二つの価値観の違いを見せつけていると思います。

ところで、話をダビデ王に戻します。イスラエルの部族を統一したダビ

デ王は、王宮に住むようになりました。そして、自分は王宮に住んでいるのに、神の箱は相変わらず、天幕の中だ、といい、神様のために神殿を建立する計画をたてます。そして実際に息子のソロモン王がそれを完成させるのですが、これを知った神様は、預言者ナタンに自分の気持ちをダビデ王に伝えるように命じて言います。

「あなたは私のために、わたしが住む家を建てようというのか。私はイスラエルの人々をエジプトから導き上った日から今日まで、家に住んだことはなく、天幕と幕屋を住みかとして歩んできた。私が、イスラエルの人々すべてとともに渡り歩いてきた間、わたしの民イスラエルを牧するように命じたイスラエルの部族の一つに、何故あなた方は私のためにレバノン杉の家を建てないのか、と一度でも言ったことがあるだろうか。今私の僕、ダビデに告げなさい。『万軍の主はこういわれる、牧場の羊の群れの後ろにいたあなたを取って、私の民イスラエルの指導者にしたのは私だ。あなたがどこに行こうと、私はともにいて、貴方の前から、敵をことごとく絶ち、地上の大いなるものの名に等しい名をあなたのものとする』」 (サムエル記下77, 4~9)

少し長い引用になりましたが、要点はこうです。

神様の後ろ盾、あるいは計らいによって王に上り詰め、最高の権力を手にしたダビデは、今度は、神様のために神殿と建立しようと考えます。しかしその意図は、自分の威光をイスラエルの民の前に示し、名誉と賛辞を民から受けたいという思惑が見て取れるのです。だから、神様は、何も自分からレバノン杉で神殿を建立することを願っていないと宣言しているのです。

今、ダビデ王の血筋であるヨゼフ様は、家の無いところで、幼子の出産を見守ります。これはヨゼフ様の力の無さでしょうか、あるいは権力の無さでしょうか、貧しさは良くないことでしょうか、いいえそうではあ

りません。

それは神様の意向であるし、人間の傲慢さや欲深さや覇権主義とは反対軸にある、本物の権力なのです。力ある方が、民を治め、悪政から救われる。そんな、神様の本質をヨセフ様は、マリア様と幼子を保護する形で私たちに示して下さっているのです。ダビデ王の血統を引くヨセフ様が、今や、全能の神の血統を引き継ぐことになりました。

教皇様は、新型コロナの感染拡大の初めにこのヨセフ年を提唱なさいました。感染症は世界規模の災害をもたらしています。これが起因して、社会の雰囲気が大いに变化したように感じます。つまり、この疫病に対する、対応の仕方で、人々の価値観に分断が生じているのです。つまり、経済優先か生命優先か、強制か自由か。民主主義か専制主義か、他にも、科学主義か信仰主義か、などがあります。

これまで一般的にはそれほど深く意識していなかった事柄が今、如実に顕在化しています。私たちはこれから、これらの価値観の分断の中で、どちらかを自発的に選択して切ることとなります。

住民登録のためにベトレヘムに参集した人々は、そこに自分の血統を求めてきた人々です。そうだとすると、幼子を救い主として信じている私たちは、ベトレヘムの町の喧騒ではなく、自分の生命のルーツを求めて、馬小屋に参集いたしましょう。

静寂の中で見守る幼子の誕生は命の輝き、生命の叫び、闇を照らす光であります。神様の命を私も洗礼によっていただいていることを再確認いたしましょう。